

2018年9月23日（日）「永遠の価値基準」

マタイ（19:30）20:1-16

（30 ただ、先の者があとになり、あとの者が先になることが多いのです。）

1 天の御国は、自分のぶどう園で働く労務者を雇いに朝早く出かけた主人のようなものです。 2 彼は、労務者たちと一日一デナリの約束ができると、彼らをぶどう園にやった。 3 それから、九時ごろに出かけてみると、別の人たちが市場に立っており、何もしていないでいた。 4 そこで、彼は那些人たちに言った。『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。相当のものを上げるから。』 5 彼らは出て行った。それからまた、十二時ごろと三時ごろに出かけて行って、同じようにした。 6 また、五時ごろ出かけてみると、別の人たちが立っていたので、彼らに言った。『なぜ、一日中仕事もしていないでここにいるのですか。』 7 彼らは言った。『だれも雇ってくれないからです。』彼は言った。『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。』

8 こうして、夕方になったので、ぶどう園の主人は、監督に言った。『労務者たちを呼んで、最後に来た者たちから順に、最初に来た者たちにまで、賃金を払ってやりなさい。』 9 そこで、五時ごろに雇われた者たちが来て、それぞれ一デナリずつもらった。 10 最初の者たちがもらいに来て、もっと多くもらえるだろうと思ったが、彼らもやはりひとり一デナリずつであった。 11 そこで、彼らはそれを受け取ると、主人に文句をつけて、 12 言った。『この最後の連中は一時間しか働かなかったのに、あなたは私たちと同じにしました。私たちは一日中、労苦と焼けるような暑さを辛抱したのです。』 13 しかし、彼はそのひとりに答えて言った。『友よ。私はあなたに何も不当なことはしていない。あなたは私と一デナリの約束をしたではありませんか。 14 自分の分を取って帰りなさい。ただ私としては、この最後の人にも、あなたと同じだけ上げたいのです。 15 自分のものを自分の思うようにしてはいけないという法がありますか。それとも、私が気前がいいので、あなたの目にはねたましく思われるのですか。』

16 このように、あとの者が先になり、先の者があとになるものです。」

【序論】

今日の箇所は、主イエスの譬話の中でも特に有名なものの一つです。朝から働いた人と夕方5時から働いた人がいる（その中間も）。ところが蓋を開けてみると、もらった給与の額は一律だったという話です。これは、地上で生きている人間であるならば、誰が読んでも不公平とを感じる話でしょう。私たちはまずここから始めなくてはなりません。不公平に感じるということが重要なのです。そこを跳ばしてしまつては、この譬話は「私たちのもの」とはならないでしょう。

スタインという注解者は、主イエスの譬話を理解するにあたって4つの重要な点があると言っています¹。

- ①たとえ話の中心ポイントを見出すこと
- ②たとえ話が語られた背景を的確に把握すること
- ③イエスのたとえ話を福音書記者がどのように解釈していたかを探ること
- ④そのたとえ話が私たちに何を語りかけているかを洞察すること

以上の点を掴み取るように、今日の譬話の中身に踏み込んでまいりましょう。

【本論】

今日は、理由があって19:30から朗読していただきました。気づかれた方も多いと思いますが、19:30と20:16ではほとんど同じことが言われているのです。目につく違いは、「先の者」と「後の者」の置かれている順序が逆であるということ。これはラテン語文学や、聖書のギリシャ語、ヘブライ語のテキストでよく使われている「キアスムス²」と呼ばれる修辞技法の一つと考えられます。マタイは明らかに、この二つの節でサンドイッチするように今日の譬話を置いている。19:30は、主イエスの許を去って行った「富める青年」の話の結論でありますから、今日の譬話はその物語をより強化する役割を果たします。主は、ペテロの「ご覧ください。私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました」(19:27)という誇りに満ちた言葉に対して、この譬話をもって答えているのです。

本論1. 何度も市場に足を運ぶ雇い人

天の御国は、自分のぶどう園で働く労務者を雇いに朝早く出かけた主人のようなものです。(20:1)

ここでは訳されていませんが、原文では冒頭に「γάρ」(なぜなら)という接続詞が入っており、19章との関係性が意識されています。

「主人」(地主、農夫)とは神を表す人物ですが、ここでは彼がぶどう園を営んでいたという設定になっています。「ぶどう園」は旧約聖書でよくイスラエルの象徴として登場します(例:イザヤ5:1-7)。ですから、ここでは第一に神と神の民の関係について

¹ Stein, *An Introduction to the Parables of Jesus*, pp.72-81

² 交錯配列法とは、お互いに関連する2つの節を、より大きなやまを生むために、その構造を反転させる修辞技法のこと。つまり、2つの節は逆転したパラレリズムで表される。(Wikipedia)

言われていると考えられるでしょう。この主人は「**労務者**」を雇いに行くのですが、これは神の国の働き人を探しに行くこと、あるいは救いへの招きの表現です。ただ、このように一つ一つの言葉を解釈すると同時に、当時の雇用事情も知っておく必要があります。これは日雇い労働者を探しに市場へ行くという状況であって、何らかの事情で職を失い、土地を追われた人々が、雇ってもらいたい一心で待ち望んでいる様子が窺えます。こういう立場の人々は、身分も低く、奴隷よりはましというくらいの見方がされていました。奴隷ならば家のメンバーの一人として数えてもらうことができましたが、日雇い労働者にはそのような保護はなかったのです。まさにその日暮らして、日々仕事を探して彷徨っている、そんな不安定な人々でありました。

彼は、労務者たちと一日一デナリの約束ができると、彼らをぶどう園にやった。 (20:2)

第一の人々は、運良くと言いますか、労働力になると見られて、一日の最初に雇ってもらえることができました。そして、「一日一デナリ」という契約を交わしてぶどう園に送られます。「一デナリ」とは労働者の一日の賃金で、現在の日本で言う 10,000 円程度と考えるのとよいでしょう。兎にも角にも、彼らは今日の仕事が見つかって一安心でした。「**やった**」と訳されている言葉は、原文では「遣わした」(ἀπέστειλεν) という語が使われていて、宣教の働きに派遣するようなニュアンスが読み取れます(ルカ 10:1-2)。

それから、九時ごろに出かけてみると、別の人たちが市場に立っており、何もしないでいた。そこで、彼は那些人たちに言った。『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。相当のものを上げるから。』 (20:3-4)

「**九時**」と訳されていますが、原文では「第三の時」。これは日の出から数えて三番目の時間帯という意味です。当時は時計というものがありませんでしたから、大まかに時間を区切って、一日に何度か労働者を探しに行ったのです。すると、早朝にはいなかった人々が仕事を求めて立っていました。ここで注目すべきことは、「主人」はその労働者たちと正式な契約を交わしていないということです。「**相当のものを上げる**」という口約束で、普通に考えれば 3 時間ほどの遅れですから、その分が差し引かれると考えたと思われま

す。
彼らは出て行った。それからまた、十二時ごろと三時ごろに出かけて行って、同じようにした。 (20:5)

大体 3 時間置きに新たな労働者を求めて市場へ赴く (第六の時、第九の時)。そして、「**幾ら**」という額は敢えて言わず、次々と雇っていきます。この「**額を言わない**」ところに主人の何かしらの意図があるように感じられます。労働者の側も、幾らもらえるかの保証もないまま、とにかく働けるのだから働こうという、ただ雇い人を信じるほかはない心情が窺えます。そして、最後の人々が登場します。

また、五時ごろ出かけてみると、別の人たちが立っていたので、彼らに言った。『なぜ、一日中仕事もしないでここにいるのですか。』彼らは言った。『だれも雇ってくれないからです。』彼は言った。『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。』(20:6-7)

「五時」(第十一の時)となると、終業時間の1時間前ですから、どう考えても労働時間はないに等しい。こんな時間になってさえ雇いに行くのは、どうしてもその日のうちにぶどうの収穫を終えたいという雇い人の思いの表れでしょう。ぶどうは熟したらすぐに収穫しないと、あっという間にダメになってしまうからです。「別の人たちが立っていた」とありますが、彼らとてこんな時間に立っていても雇われる望みがほとんどないことくらい分かっていたでしょう。しかし、それでも立ち続けているところに、彼らの必死な思いが窺えます。文字通りに読めば、「一日中」市場で待っていたのかも知れません。雇い人はここで「なぜ、一日中仕事もしないでここにいるのですか」と問うていますが、これは「怠け者め!」と責める言葉というより、「かわいそうに、まだ仕事にありつかなかったのか…」という憐れみの表現と捉えた方がよいでしょう。「だれも雇ってくれないからです」と答えているように、彼らは肉体的に労働力と見なされなかったか、到底役に立ちそうもない者として排除された人々だと思われまふ。あらゆる雇用主から見捨てられ、11時間不安と苦しみの中で立ち尽くしていた。これらの人々にも主人は言います。「あなたがたも、ぶどう園に行きなさい」。ここでは、契約が結ばれたとも言われていなければ、報酬の約束もなく、労働者側の同意もありません。言われたから行く。ただそれだけなのです。この「5時から男たち」(グロンサンのCM!?)こそ、主人の憐れみにすぎるほかなき立場に置かれていたとすることができるでしょう。

本論2. 永遠の世界ではすべての順位は一律になる

こうして、夕方になったので、ぶどう園の主人は、監督に言った。『労務者たちを呼んで、最後に来た者たちから順に、最初に来た者たちにまで、賃金を払ってやりなさい。』(19:8) さて、労働時間が終わり、いよいよ賃金の受け渡しとなります。ユダヤでは、貧しい日雇い労働者にはその日のうちに支払いをすることが律法で定められていました(レビ19:13、申命24:14-15)。「監督」とは、ぶどう園ですべての労働者に仕事を割り振る責任者のことですが、キリストが暗示されているのかも知れません。どこか最後の審判を思わせる場面です。賃金の支払いというのは、私たちの生きる社会ではほとんどが銀行振込ではないでしょうか。ただ、私もある仕事をしていて、給料日に従業員が全員並ばされて、社長から直接給与の入った封筒を手渡されるという経験をしたことがあります。自分の名前が呼ばれ、受け取るのは、独特の緊張感を覚えるものでした。

ここで雇い人が指示している内容に注目しましょう。彼は、「最後に来た者たちから順に」支払いを始めていきます。ここには、譬話上の何か「あてつけ」のようなものが感じられます。もし私が雇い人であったならば、現金を丸見えで渡すようなことはしませんし、一番多く働いた人から始めて、受け取った人が帰ったのを見てから、そっとそれ以外の人たちに手渡していくでしょう。しかし、この雇い人は敢えてすべての人に分かるような形で、しかも「最後に来た者たちから」支払いを始めていくのです。

そこで、五時ごろに雇われた者たちが来て、それぞれ一デナリずつもらった。最初の者たちがもらいに来て、もっと多くもらえるだろうと思ったが、彼らもやはりひとり一デナリずつであった。(20:9-10)

5時から働いた人々は、思ってもみない金額に飛び上がるほど喜んだことでしょう。信じられない思いで佇んでいたかも知れません。恐らく、中間の時間帯に来た人々も同額で、誰も文句はなかったでしょう。しかし、最初から働いていた人々は違いました。彼らは「5時から男」が1デナリだったのだから、少なくともその何倍かはもらえるのではないかと期待したのです。そして、不平不満を爆発させます。

そこで、彼らはそれを受け取ると、主人に文句をつけて、言った。『この最後の連中は一時間しか働かなかったのに、あなたは私たちと同じにしました。私たちは一日中、労苦と焼けるような暑さを辛抱したのです。』(20:11-12)

これは常識的に考えれば無理からぬことです。私たち人間はどうしても人と自分とを比較し、損得勘定で物事を考えやすい。一つ、私が経験したよく似た状況の話をさせていただきます。私が一夏農家で働かせていただいていた時に、先に雇われていた二人の同年代の青年がいました。A君はよく仕事ができるのですが、B君は隙あらばサボるタイプで、他の人たちが働いている間にも子どもたちと遊んだりしていました。すると、ついにA君の怒りは爆発し、「あんな奴と同じ給料なんてやってられねえ！」と不平をこぼし始めました。この時の状況は、どことなく今日の箇所を思い起こさせるものでした。

ここで、朝から働いていた人々が「私たちが彼らと同じにした」ではなく、「彼らを私たちと同じにした」と言っている点に注目しましょう。彼らの心の内には「一日中働いた」という誇りがあったように感じられます。「あの程度の仕事しかしてねえ奴らが、一日中炎天下で働いた俺たちと一緒にされるだって？ふぜけんじゃねえ！」という気持ちなのでしょう。たった1時間の労働が12時間に匹敵するものと見なされている。許せねえ！彼らの態度からは、給与をもらえる喜び、雇ってもらえたことへの感謝、その日の糧が与えられたことへの安心感といったものはもはや感じられません。人とはこうなり得るのです。「万事がおかしくなるのは、比較をすることによってである」(シュバイツァー)。彼らの問題は、他人と自分とを比較したところにあったのです。

しかし、彼はそのひとりに答えて言った。『友よ。私はあなたに何も不当なことはしていない。あなたは私と一デナリの約束をしたではありませんか。自分の分を取って帰りなさい。ただ私としては、この最後の人にも、あなたと同じだけ上げたいのです。自分のものを自分の思うようにしてはいけないという法がありますか。それとも、私が気前がいいので、あなたの目にはねたましく思われるのですか。』(20:13-15)

雇い人は「そのひとり」(代表者)に答えたようです。恐らく、一番リーダーシップがあって、収穫に貢献した人なのでしょう。雇い人の論点は二つあります。

- ①自分は当初の約束通り1デナリをあげるのであって、何ら不当なことはしていない。
- ②後から来た人々にどれだけあげるかは、自分の一存である。

冷静に読めば、この雇い人の言っていることは何もおかしいことはありません。重要なことは、この雇い人が弱者に対して極めて寛大であるということです。彼は、5時まで雇ってもらえなかった人々の不安と苦悩を理解していました。彼らにも養わなくてはならない家族があったかも知れません。「雇ってもらえない」という不安は、多く働いている疲労度にもまして大きいものなのです(現代では就活の困難さに表されるでしょう)。雇い人は、そんな彼らを憐れみ、彼らが生活していけるように、等しい賃金を与えたのでした。

このことは、まさしく恵み深い神の性質を表しています。神は何の功績もない者にさえ、無条件に恵みをお与えになるのです。

何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。(ローマ4:5)

そもそも、朝から働いていた者も、恵みによって雇ってもらえたということを忘れてはなりません。彼らとて、誰からも雇われない可能性があったのです。この箇所と関連が深いのは、放蕩息子とその兄のストーリーでしょう(ルカ15:11-32)。放蕩息子は父親の財産を使い果たして帰ってきた。その出来の悪い息子が無条件に受け入れ、その子のために子牛を屠り、指輪をはめた父親に対し、真面目に父親の許で働いてきた兄は腹を立てました。この兄の不平は、人間世界の常識を基準に考えれば当然のことです。しかし、神の国の価値基準では違います。私たちは有限の世界に生きていますから、すべてのことを数字で考えやすい。しかし、神は永遠のお方であり、神の国の価値観も無限です。つまり、有限は無限に飲まれてしまう。どんな立派な働きをしてきた人も、死ぬ間際に信じた人も、神の御前には一律であり、恵みはすべてを覆い尽くすのです。いえ、むしろ放蕩息子の兄も、朝から働いた労働者も気づかなくてはなりません。先に神の近くで生きられるようになったという安心は、最後によく神を知った者とは比べものにならないほど大きな恵みだったのです。

【結論】

今日は最初のところで、「主人と労務者」の関係を「神とイスラエル」、労務者を雇いに行くことを「神の国の働き人を探しに行くこと」「救いへの招き」とご説明しました。加えて、「朝から働いた人」を「人生の早い段階で救われ、宣教の働きに就いた人」、「5時から働いた人」を「人生の終わりに救われ、ほとんど何もできなかった人」と捉えることができたと思います。このことは、もっと幅広く解釈することもできるでしょう。「イスラエルと異邦人の関係」「十二弟子と富める青年」「クリスチャンホームで育った人と未信者の家庭から救われた人」など。いずれにせよ、先に神を知った人は、後から神を知った人に対して優越感を持つ危険性があります。後から主の弟子になった人に対して懐疑的な目を向けることもある。しかし、神の基準で見えていくなれば、先の者と後の者のどちらが偉いということはなく、その順序はいくらでもひっくり返るのです。誰も恵みに依らずしては救われ得ません。神の国、永遠の世界に生き始めた人は、すべてのことを「神の無限の恵み」に基づいて見るようになるのです。

【祈り】

恵みの神よ。人は皆、罪を犯し、あなたから離れた存在となりました。しかし、あなたはすべての人に等しく恵みを注ぎ、救いに招き入れることがおできになります。その救いは、人の功績も、持物も、この世の立場も、はたまた人徳でさえも無関係です。ただあなたの憐れみによって人は救われるのです。私たちが皆、神の御前にある自分の立場をわきまえ、互いを尊重し合うことができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
福音宣教の働きのため、罪深い者を召し出し、ご自身の農園に派遣し給う、父なる神の愛。
早朝から働いた者にも、一日の終わりから働いた者にも、等しい賃金を与え給う、主イエス・キリストの恵み。
永遠という次元における神の恵み深さを理解させ、ただ救われた喜びに溢れさせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。